



偉人伝
エリック・ホツファー



ko13

エリック・ホッファー

エリック・ホッファー (Eric Hoffer)

1902年7月25日～1983年5月20日

享年80歳

日雇労働者、大学教授、社会心理学者、TVコメンテーター

■貧困家庭の子どもとして生誕

ニューヨークのブロンクスにて、ドイツ系移民の子として生まれる。

貧困家庭で7歳にして母親と死別。さらに同年、視力を失う。

15歳で奇跡的に視力が回復し、それ以来、また失明してしまうのではないのか、という恐怖心から、貪るように読書に励んだという。

18歳の頃、唯一の肉親である父親が他界。

こうしてエリック・ホッファーは天涯孤独の身となってしまった。

今まで一度も学校に通ったこともない。頼れる人も、誰もいない。

しかし悲しむ暇もなく、境遇も何ら変わらず、幼い頃から続けていた通り、

ただ今日、飯を食べるために働くしかなかった。

靴磨き、新聞配達、ゴミ掃除、市場での売り子、運搬、バーテンなど、

さまざまな仕事をしてきたが、そんなニューヨークを離れて、ロサンゼルスへ。

しかし、そこでも何も変わらない貧民窟で、日雇いの仕事を続けるだけの毎日。

28歳の年、ついに人生に絶望し、多量のシュウ酸を飲んで自殺を図るが失敗。

ロサンゼルスを去り、カリフォルニアへ移って、季節労働者として農園を渡り歩く。

そんな仕事を通じて植物に興味を湧いて、労働の合間に図書館へ通って植物学について学習し、さらに物理学と数学をも独学でマスターする。

■偶然の出会い

ある日、働いていたレストランで、ある男性客が書物に視線を落としながら頭を抱えていた。

それはドイツ語で記されていた植物学の文献だった。

ホッファーは、それを正確に翻訳してしまう。

男性客は驚き、ホッファーと話をし、植物学にも精通していることを知り、さらに驚いてしまった。

「私のところで働かないか？」と男性客は言った。

この男性はカルフォルニア大学バークレー校柑橘類研究所所長のスティルトン教授であった。こうしてホッファーは、同研究所で臨時の研究員として働くことになった。

彼は当時、カリフォルニア州で流行していたレモンの白化現象の原因を突き止め、その功績が認められて正式な研究員のポストが与えられるが、彼はそれを断ってしまう。そして再び、日雇いの仕事を渡り歩く。

■雪山での生活のなかで魅了されたモンテーニュ著『エッセー』

ヒットラーが台頭し、世の中に殺伐とした空気が漂っていた。

そんな34歳の冬、ホッファーは砂金を掘る季節労働者の1人として、ひと冬を雪山で過ごしていた。

仕事の合間の暇つぶしに、と道中の古本屋で買ったミシェル・ド・モンテーニュ著『エッセー』に、
すっかり魅了されてしまった彼が、そこにいた。

書物には「私自身というものよりも、大きな怪物や驚異は見たことがない」と記されていた。

また、結婚について「結婚は鳥籠のようなものである。その外にいる鳥は必死になって入ろうとするが、

中にいる鳥は必死になって出ようとする」という言葉には、思わず笑ってしまったり。

自分自身の貧弱な記憶力のこと、感情的にならずに問題を解決する能力のこと、名声を欲しがると人間への嫌悪感について、死に臨み世俗から離れようとする試みのことなど、特定の話題に関する主観的な短い文章、人間のあらゆる行為を省察する文章が、その1冊のなかに詰め込まれていた。

ホッファーは、この本を3度も読み返して、ついに、ほとんどを暗記してしまった。

そして、この本によってホッファーは「書く」という行為を意識し始めたという。

■ベスト・セラー作家となる

1941年から彼はサンフランシスコの港で、
貨物の荷揚げ作業という「沖仲仕」と呼ばれる肉体労働をしていたが、
この仕事を通じて、外国からやってくる人々の話を聞いて、
まとめた原稿が『The True Believer (1951)』／邦訳『大衆運動』というタイトルで出版され、
それは、たちまちベスト・セラーとなった。

そこには「どうして人々は、そんなことに夢中になってしまうのか」という観察的な視点によ
って、
詳細な人間の行動分析が記されていた。

たとえば、人が何らかの「運動」に参加するための条件には、大きく4つあるとホフファーは記し
ている。

「現状の生活に、激しい不満を抱いている」

「そこには有力な主義が、間違えることのない指導者が、新しい技術があると感じている」

「未来の展望と可能性についても、途方もない夢を感じている」

「自分たちの巨大な事業にともなう困難について、まったく無知である」

こうしたタイプが、新しい政治や商売、宗教などの活動に夢中になるのだと説き、
さらに、それぞれに人々の種類を細かく解析している。
そして彼は後半、ひとつのまとめとして、こう記した。

「運動は言論人によって開拓され、狂信者によって具体化され、活動家によって強化される」

また、この時、56歳から約1年間、書き続けていた日記も
『波止場日記』という書籍になって1969年に出版された。

これは前出の書籍とは、まったく異なる前後の脈絡すらもない、ただの日記である。
日々の出来事が断片的に綴られるだけのもの。
だが、しかし、そこには深い人間観察、人生の思案が記されていた。

内容としては、まず波止場で働く人々について。組んで作業するパートナーについて、
組合、組合活動家について。

ホフファーが好んでとりあげるのは、普通のアメリカ人。

普通のアメリカ人とは同僚であり、自分のことであり、大衆のこと。

こうした大衆の対極にあるのが知識人であり、彼は大衆を利用、操作し、搾取する傾向にある知識人を好まなかった。

「午前10時。組合の集会に行った。集会の前半はまったく退屈。後半の議題は組合本部の貸借およびくず鉄仕事のペテン師の処分方法について。提案された解決法は独創的で簡潔なものであった。簡潔さは頭の切れを感じさせる」

「たびたび感銘を受けるのだが、すぐれた人々、性格がやさしく内面的な優雅さをもった人々が、波止場にたくさんいる。この前の仕事で、あまり面識のないかなり年輩の連中としばらく一緒になったが、ふと気づくと、この二人はなんと立派で寛大な、有能で、聡明な人間なんだろう、と考えていた。じっと見ていると、彼らは賢明なばかりでなく、驚くほど独創的なやり方で仕事にとりこんでいた。しかも、いつも遊んでいるかのように仕事をするのである」

「もし南部のニグロが真の平等を得たいのなら、ニグロは自分の力で闘い取らなければならない」
自分の力で闘いとるとは、たとえば優秀な職業学校を設立する、という意味である。

そして自分自身について「私が満足するのに必要なものは、ごくわずかである。1日2回のおいしい食事、タバコ、私の関心をひく本、少々の著述を毎日。これが、私にとっては生活のすべてである」

さらに自由について「自分の観念を考え抜くためには知的孤立が必要である」と記した。

■大学教授に就任、退職

1964年から1972年までホッファーは、カリフォルニア大学バークレー校の政治学研究教授になった。

しかし彼は、大学教授になったというのに65歳まで沖での日雇い仕事はやめなかった。ホッファーによると「沖仲仕ほど自由と運動と閑暇と収入が適度に調和した仕事はない」と語ったという。

そして相変わらず、知識をひけらかすインテリたちを嫌い続けた。

1967年、CBCテレビの対談番組に出演。

彼の言葉は、全米各地で大きな反響を呼んだ。

以来、年に1度は出演することになる。

ある時、ホッファーは、ヒットラーについて、ユダヤ人の大量虐殺について問われて、このように語った。

「残酷無比なことをした人にとって、純粹無私という言葉はとても都合が良い。

ヒットラーは純粹無私だった」

ヒットラーはドイツ人こそが、世界に誇る優秀なエリート民族であると語った。

実際、当時のドイツは世界屈指の高い教育水準にあった。

だからこそ、そんな優秀な血統が、ユダヤという外国人との混血になることは我慢できない、と。

つまりヒットラーは私ごとを一切捨てて、愛するドイツのために純粹であった。

だからこそ、あんなに残酷なことができたのだ、と。

彼はこのような意味の言葉によって、戦争反対を告げていた。

「愛情、勇気、忠誠、友情、正義...とても美しい言葉だが、それらは簡単に非情なる冷酷さに変わることがある。

しかし常に心の奥底からは、残酷な行為を押しとどめるための、か細い声が聞こえている。

そして、思いやりのある者だけが、か細い声を聴きとることができる。この声は神の声、良心の声である」

どこの国の人々も愛する国のために、愛する家族のために忠誠を誓って、

それは正義のために、そして勇気を示すために兵隊になって、敵と呼ばれる人々を殺害する。

兵隊にとって戦争で敵兵を殺すことは、誇り高きことなのだ。

でも、これは間違ったことではないのか、と常に心の底から良心の声が聞こえているはずなのだ、と。

頑固に心を閉じた者には、その声は聞こえない。

しかし殺される立場の人について、その痛み、つらさ、悲しみについて、

思いやりのある者たちには、その声は聞こえるはずなのだ、と。

1970年代に入って、番組のテーマは、アメリカの若者たちのヒッピー、マリファナ、学生運動について移って行く。

この時代、ホッファーは特に若い人々から知的カリスマとして絶大な人気を集めていたという

のに、
彼はそんな若者たちを「甘やかされた子ども」と断言した。

1983年、ホフファーは80歳で、その生涯を終えた。
それは、まさに偉大なる人間分析者の死だった。
彼の訃報に際して、当時のアメリカ大統領ロナルド・レーガンは大統領自由勲章を送った。

■「エリック・ホフファー」とは何者だったのか

彼の著書を見ると社会学者とも、哲学者、思想家とも呼ぶことができる。
それほど研究領域は多岐に渡っており、また、それだけに業界や世代を超えて、
時代と社会のなかで生きる人々に多大な影響を与えた。

そんな彼は作家になりたかったわけではなく、大学教授になりたかったわけではなく、
テレビ番組のコメンテーターになりたかったわけでもない。

彼は「語らざるを得なかった」「書かざるを得なかった」人物であった。
誰かに伝えたいという欲望すらもなく、ただ頭の中から溢れ出す思考について、語らずにはいられない、
書きまとめずにはいられない、そんな人物であったのだ、と。

だからこそ彼には、ぴったりと当てはまる肩書きが、ない。
それは、まるで近代の預言者(※人々の言葉を預かる者)のような存在にも映る。

事実、彼の著書は時代を変えて、現在には『エリック・ホフファーの名台詞集』などと
編集された書物までもが出版されるなど、版を重ね続けている。
現代を生きる人々も、いまだ彼の言葉を求めているのだから。

■著作

- 『The True Believer: Thoughts on the Nature of Mass Movements.』 (1951年)
- 『大衆』 (訳・高根正昭 紀伊国屋書店 1961年)
- 高根正昭訳『大衆運動』 (訳・高根正昭 紀伊国屋書店1969年／復刻版2003年)
- 『The Passionate State of Mind and Other Aphorisms.』 (1955年)
- 「情熱的な精神状態」永井編『現代人の思想 (16) 政治的人間』 (訳・永井陽之助 平凡社1967年)

「情熱的な精神状態」『魂の錬金術 - エリック・ホッファー全アフォーリズム集』（訳・中本義彦 作品社2003年）

『The Ordeal of Change.』（1963年）

『変化という試練』（訳・田崎淑子、露木栄子 大和書房1965年）

『Working and Thinking on the Waterfront:a Journal, June 1958-May 1959』（1969年）

『波止場日記 労働と思索』（訳・田中淳 みすず書房1971年）

『The Temper of Our Time.』（1967年）

『現代という時代の気質』（訳・柄谷行人、柄谷真佐子 晶文社1972年）

『First Things, Last Things.』（1971年）

『初めのこと今のこと』（訳・田中淳 河出書房新社1972年）

『エリック・ホッファーの人間とは何か』（訳・田中淳 河出書房新社2003年）

『Reflections on the Human Condition.』（1973年）

「人間の条件について」『魂の錬金術 エリック・ホッファー全アフォーリズム集』（訳・中本義彦 作品社2003年）

『In Our Time.』（1976年）

『Before the Sabbath.』（1979年）

『安息日の前に』（訳・中本義彦 作品社2004年）

『Between the Devil and the Dragon: The Best Essays and Aphorisms of Eric Hoffer.』（1982年）

『Truth Imagined.』（1983年）

『エリック・ホッファー自伝 構想された真実』（訳・中本義彦 作品社2002年）